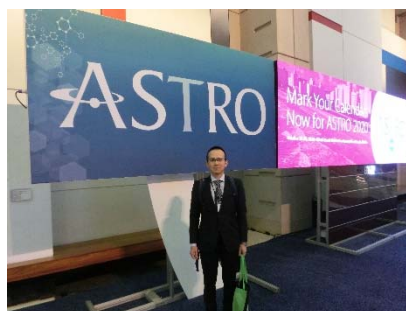


第 61 回米国放射線腫瘍学会 (ASTRO) に参加して

広島赤十字・原爆病院 放射線治療科 勝田 剛

今回特定非営利活動法人がんと闘う広島ネットワークから海外研修補助金を頂き、2019/09/15-18 にシカゴで開催されたアメリカ放射線腫瘍学会 (ASTRO) に参加してきました。

特別シンポジウムでは「Curing Metastatic Disease with Radiotherapy: Myth or Reality」と題して遠隔転移を有する進行期のがんに対する最新の研究が発表されていました。近年進行期に対して免疫療法が臨床導入され、限られた状況下では放射線治療と併用することで免疫療法単独で治療するよりも成績が向上すると言われています。少数転移の場合、腫瘍が長期間存在することで腫瘍を攻撃する T 細胞の免疫寛容につながり免疫力が低下してしまう。しかし、放射線治療を加え腫瘍量を減らすことで免疫力が維持・向上することができるという考えはセンセーショナルでした。



放射線治療技術の新しい進歩として FLASH が注目されていました。FLASH とは超高線量率放射線治療のことで、高線量の放射線をまるで「フラッシュ」のように一瞬で照射できる技術です。それにより腫瘍組織への効果も得ながら、従来よりも正常組織への有害事象や副作用を減らせる可能性があります。特に肺や肝臓など、臓器の移動が大きい部位への定位 (ピンポイント) 照射に有効であろうと思われます。



私自身も MALT リンパ腫放射線治療後の副作用の検討について英語での発表を行いました。質疑応答ではテンポの速い英語での質問を受け、何とか答えたつもりでしたが、やはり英語に関しては普段からトレーニングを行っていく必要性を感じました。

総括として、現在の放射線治療は進行期のがんに対しては免疫療法などと組み合わせることで治療成績の向上を図る流れになっていると感じました。また腫瘍の遺伝子情報による治療の差別化も行われています。今後は成績の維持や向上のためにどのくらい/どの範囲まで放射線を照射すればよいのかということが変わってくるものと思われます。自身の印象では過去と比べて線量は低く、照射範囲は狭くなってきている印象です。一方で初期のがんに対しては定位照射に代表されるように、より短期間で高線量を照射する流れになってきており、それを可能にする治療技術・機械が開発されています。今後放射線腫瘍医にはがん患者さんの種類・病期 (ステージ)・遺伝子情報・過去の治療のみならず、体力・既往症・思いを多角的に考えて、最適な治療法を提供できる総合的能力がますます必要とされると改めて痛感しました。

最後に今回のような海外の学術集會に参加し最先端の知見に触れる貴重な機会を頂き、代表の永田靖先生をはじめとして、役員の皆様方にこの場を借りまして心より感謝申し上げます。

2019年09月22日